

一月後、佐礼山の高市から照会してもらった亀井正利の長男の勝利から、「よろしければお越し願いたい」という葉書が舞いこんだ。父の十三回忌が近くなって、久しぶりに佐礼山の墓所の掃除へ行き、立ち寄った村役場で高市部長から志村のことを聞いたのだ。グラマン墜落事件でお見せしたいものがあると葉書に書いてあった。

秀次郎はさっそく八幡浜に住む亀井勝利を訪ねることにした。大助の都合にあわせたので出発は幼稚園の七夕祭りが終わった翌日だった。

行きは佐礼山へ行ったときと同じJRのディーゼル車である。一両編成だけの客車は左右に長椅子があるだけなので、二人は肩を並べて座った。市街地をぬけると、車内はがらがらになり、沿線いっぱいにせりだした夏の森の色が車内をまだらに染める。大助は幼稚園児のようにきょろきょろと外をながめ、秀次郎と一緒に出かけることが楽しくてたまらないといった様子であった。

八幡浜駅の改札口を出ると青い開襟シャツ姿の小柄な男が二人に近寄って来た。亀井ですと名乗り、高市さんから教えてもらってましたからすぐわかりました、と志村のことをいった。浅黒い顔が酒焼けして光っている。長いことマ

グロ漁船に乗ったりしましたが、いまはもう陸おかに上がり近くの蒲鉾工場かまぼこに通うて日銭を稼ぐ生活ですわ、と聞きもしないのにそんなことを話しながら、駐車場の方へ歩きだした。

二人は亀井の車で家に案内された。

港に面した急な斜面に建ち並んだ平屋の一つである。通された座敷から港が手に取るように見える。あがってくる風は海の匂いがする。「戦犯事件」のスタンプについて、勝利は次のようなことを話した。

勝利の下に二人の妹がいて、父の正利が大阪から帰ってきた昭和二十四年と翌々年にそれぞれ地元の中学を卒えて関西の方へ就職した。この二人の妹の就職と結婚のときに戸籍表が必要だったが、役場から取り寄せたものにはスタンプが押されていたのだった。幸いこのスタンプが障害になることはなかったのだが、講話条約発効後にもスタンプが押されることに憤慨した母親が、訴えていくところを探していたところ、人づてに戦犯遺族会のことを知り政江に手紙を出したのであった。「あの日、二人がおいでになることになって、夫婦喧嘩がありました」



挿絵 (S. Nakanishi)

勝利は目をほそめ、海をながめた。

正利が事を荒立てるのを嫌ったのである。政江と秀次郎が佐礼山を訪ねた日、夫婦は申し合わせて山仕事へ出かけ、家を空けていた。田の草取りをしていた勝利は、二人がバスを降り、石垣を上がっていくのを見ていたのである。

「おやじは、気の小さい男でしたから、グラマンのことも最期までわしら家族にさえいわなんだです」

死期が近いことを知った正利は、勝利を佐礼山へ呼び、納屋へ連れていくと、木箱を取り出した。蓋を開けると中に白い布が入っていた。パラシュートの切れ端であった。

勝利はそこで父からグラマンのパイロットのことを聞いたのである。

グラマンが墜落して五日後、紫電改墜落の一部始終が村中に広まり、警防団の山狩りもうやむやになっていた。

その朝、正利が炭焼き小屋へ行くと、カーキ色の服が目を刺した。瞬時に事情のみこめた。面倒なことになりそうだ、という恐怖に近い思いがすぐ頭をもたげた。一步、小屋の中へ踏み込み、のぞきこむと、パイロットが身体をくの字に曲げ、横たわっている。死んでいるのか、まったく動きはなかった。壁伝いに近づき、見下ろした。まだ若い。少年のような顔立ちである。正利はす

一と気が静まるのがわかった。血糊のついた手を取るとまだ温もりがある。かすかに脈もある。

正利は小屋の木炭に火を入れた。小屋が暖かくなると、かれはいったん外へ出て、谷から桶いっぱいの水を運びあげた。湯をつくっていると、気配を感じたのか、パイロットが薄く目を開けた。口が動き、何かいった。正利は茶わんに水を入れ差し出したが、相手は自分の力では飲めないでいる。かれは水を口に何度もふくませてやった。それから、腰にぶら下げてきた弁当を土鍋に移し、粥をつくった。冷めるのを待ち、糊のような粥を箸で少しずつ口に入れてやった。

眠りに落ちたパイロットを眺めているうちに正利は不安にかられ、外へ出て落下傘を探した。それは山頂へ登る獣道<sup>けものみち</sup>がぬける林の枝先にひかかっていた。

正利は鉦<sup>なた</sup>で枝をはらいながら警防団にしらせるべきかどうか迷いが生じた。警防団が知れば、やはり憲兵隊へ通知され、あの若者は捕虜としての扱いを受ける。あの容態では、医者の手当てを受ける前に銃殺ということも十分に考えられた。落下傘を切り刻んだ正利は、もう二三日様子を見て、もし助かるような

ら戦争が終わるまで小屋に<sup>かくま</sup>匿ってやろうと決心した。

その夜、正利は一睡もせず炭火の番をし若者の傍らにいた。墜落から六日目の昼、目を開けた若者はしきりに何か書きたがっていた。正利は板を落下傘の切れ端で覆い、手に木炭を握らせた。

「これが、それです」

勝利は軸物を入れる箱から白っぽい布を取り出し座卓の上にひろげた。うすく木炭で書いたローマ字が浮かんでいる。

「THANK YOU」

その日の夕方、パイロットは眠るように事切れたのだった。

「おやじは、憲兵隊の捕虜の取り扱いを信用していなかったが、かといって医者と呼ばなかったことは生涯悔やんどりました。その気持ちが戦犯容疑を甘んじて受けさせたのやろと思います」